

自己指導能力を育成する生徒指導の在り方

～家庭・地域との協働による生徒指導の機能を生かした教育活動を通して～

目 次

I 研究の概要

1 研究主題	5-1
2 主題設定の理由	5-1
3 研究目的	5-1
4 研究仮説	5-1
5 研究の全体構想	5-2
6 研究経過	5-2

II 研究の実際

1 理論研究	5-3
(1) 自己指導能力を育む家庭・地域との協働	5-3
(2) 家庭・地域との協働による生徒指導の機能を生かした教育活動の考え方	5-5
(3) 協働を成功させるための留意点	5-7
2 協働を実施するための体制の整備	5-9
(1) 協働を推進する組織づくり	5-9
(2) 協働を実施する年間の流れ	5-10
(3) 協働の原則に迫る手立て	5-10
(4) 協働が可能な対象の把握	5-12
3 協働による生徒指導の機能を生かした教育活動の実践	5-13
(1) 検証授業の概要	5-13
(2) 自己存在感について	5-17
(3) 共感的人間関係について	5-18
(4) 自己決定について	5-18
(5) その他の主体的な関わり	5-19
(6) 検証授業のまとめ	5-20

III 研究の成果	5-20
1 成果	5-20
2 課題	5-20
〈参考文献〉	5-20

研究実践学校 小林市立小林中学校

研 究 員 武 田 大 典

I 研究の概要

1 研究主題

自己指導能力を育成する生徒指導の在り方

～家庭・地域との協働による生徒指導の機能を生かした教育活動を通して～

2 主題設定の理由

現在、学校における生徒指導上の諸問題は、極めて多岐にわたるものとなっている。基本的な生活習慣にかかわる日常の生徒指導上の問題はもとより、不登校や中途退学、いじめや暴力行為などの諸問題も、依然として深刻な状況が見られる。また、学校外においても、少年非行の多様化・低年齢化が見られる。これらの背景・要因としては、社会全体の変化と子どもや大人の意識や行動の変化があげられる。高度情報化や都市化、少子化といった急激な社会変化の中、これまでの学校、家庭、地域社会の個別の教育力では青少年の健全育成に十分に対応できなくなっている状況もある。こうした中、学校における生徒指導においては、時代の変化と新たな社会環境の中に生きる子どもたちを捉えた実践が必要になっている。

このような中、本県の教育創造プラン「宮崎ならではの教育」では、心の教育の充実を図るために、よりよい人間関係を築き、規範意識を身につけさせることを基盤とした取組を掲げ、家庭、学校、地域社会における実際の生活の中で自己指導能力を育成していく方針を打ち出している。

さらにこの方針をうけ、小林市では、「夢と元気と勇気ある小林教育」を教育理念とし、今年度より「こすもす科」を中心とした小中一貫教育に取り組んでいる。この小中一貫教育では、児童生徒が学校で学んだことを、地域で実践することを通して、真の「生きる力」を育むために、「地域の子どもは地域で育てる」という機運を高めていくことが必要とされている。

研究実践校では、教育目標に「真剣な学習、思いやりのある心、粘り強い心と身体」を掲げ、その具現化のために「将来に向けての目標を持ち、自己実現のために努力するとともに、社会に貢献できる生徒の育成」に取り組んでいる。

研究実践校は、生徒数 490 名の大規模校である。豊かな自然に囲まれ、純朴で素直な生徒が多い。部活動も盛んで県大会だけでなく、九州大会や全国大会で活躍する生徒もいる。

一方で、積極性に欠け、他人任せな一面がみられる生徒も少なくなく、学級の役員などがなかなか決まらないこともある。学校行事などに主体的に関わるができない生徒も少なくない。このように、人間関係が希薄で他人のことに無関心な面も見られる。学校・家庭・地域のつながりも薄れてきており、保護者の参観日の出席率が 30%程度、地区座談会では 10%程度と著しく低く、PTA 活動も一部の熱心な保護者に任せきりになっている面がある。また、自治会に入っていない家庭が増加傾向にあるなど、地域住民どうしのつながりも希薄になっている。

しかし、保護者や地域の方々と親密に接してみると、「生徒たちのために何かしてあげたい。」「自分たちの母校でもあるので何かあれば協力したい。」など、私たち教職員が考えている以上に、学校という存在に関心を抱いているということがわかり、学校が家庭・地域の教育力を生かしきれていない実態に気づいた。

昨年度まで、生徒指導部は、生徒指導方針に自己指導能力の育成を掲げ、指導にあたってきた。また、積極的に家庭・地域との連携を推進し、地区座談会の実施や地区一斉清掃などを企画し実践してきた。しかし、教職員や保護者、地域の方々との目的意識の共有や手立てが不十分で、単なる活動だけに終わってしまい事後の指導に生かされないなど、十分な成果をあげることはできていない。

そこで、本研究では、家庭や地域と協働しながら、生徒指導の機能を生かした教育活動を行う中で、家庭や地域の教育力が生かすことによって、主体性や協調性などの大切さを学び、自己をしっかりと見つめ、目標に向かって自発的に努力しようとする自己指導能力が生徒に身につくのではないかと考え本主題を設定した。

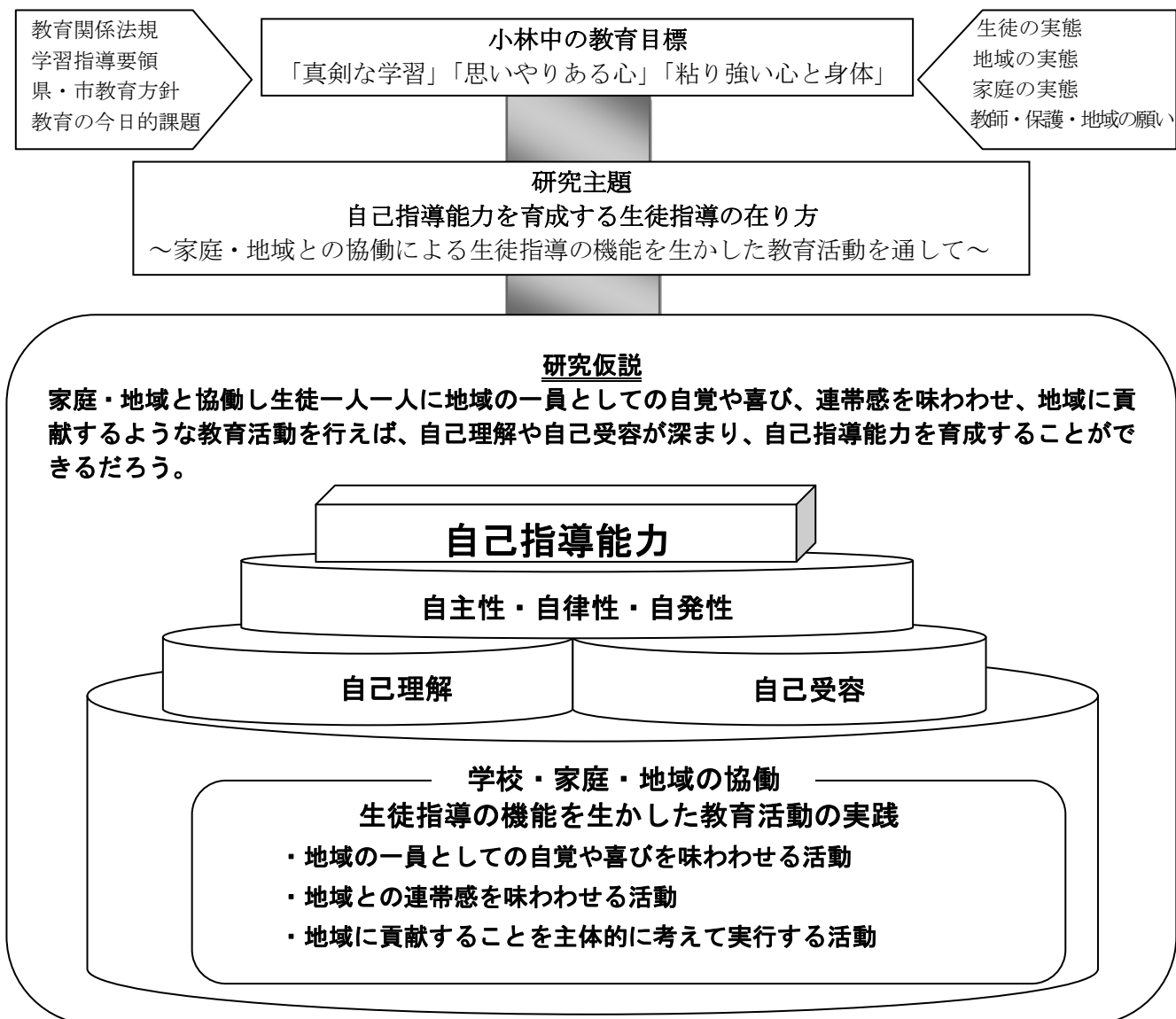
3 研究目的

生徒の自己指導能力を育成するため、家庭・地域との協働を基にした生徒指導の機能を生かし、自己理解や自己受容を深める教育活動のあり方を究明する。

4 研究仮説

家庭・地域と協働し、生徒一人一人に地域の一員としての自覚や喜び、連帯感を味わわせ、地域に貢献するような教育活動を行えば、自己理解や自己受容が深まり、自己指導能力を育成することができるだろう。

5 研究の全体構想



6 研究経過

月	研究内容	備考
4	○ 研究主題、副題の設定、研究計画の立案	
5	○ 研究実践校の地域連携の実態を把握及び課題の要因の分析	
6	○ 地域との協働を推進する組織・体制づくり	小林中学校
7	・ 研究実践校企画委員会との協議 ・ 学校評議委員会、PTA地区育成部との協議、委員の人選	
8	○ 第1回健全育成委員会の実施	小林中学校
9	○ 第2回健全育成委員会の実施	小林中学校
10	○ 地区一斉清掃の実施計画作成 ・ 協働の対象の決定	小林中学校
11	○ 検証 地区一斉清掃事前学習、地区一斉清掃 ○ 研究のまとめ ・ 組織・体制及び生徒指導の効果についての検証 ・ 生徒の変容、協働の成果の検証	小林中学校
12	○ 研究報告書の作成	
1	○ 研究発表の準備	
2	○ 研究発表の準備 ○ 第3回健全育成委員会の実施	小林中学校
3	○ 研究発表	

II 研究の実際

1 理論研究

(1) 自己指導能力を育成する家庭・地域との協働

① 自己指導能力が高められた生徒像

文部科学省では「生徒指導」や「自己指導能力」について次のように示している。

【生徒指導とは】

一人一人の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助を行いながら、生徒の自己指導能力の育成を目指すものである。

【自己指導能力とは】

自己をありのままに認めること(自己受容)、自己に対する洞察を深めること(自己理解)を基盤に、自らの追求しつつある目標を確立、明確化するとともに、目標達成に向けて自発的、自立的に自らの行動を決断実践することなど。

(文部省 昭和 63 年 3 月「生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導」より)

このことを踏まえて本研究では、自己指導能力が高められた生徒像を次のように設定し、これらを具現化するために、「一人一人の個性の伸長」「社会的な資質や能力・態度の育成」「社会的自己実現ができる資質・態度の形成」を目的とした積極的生徒指導を展開していきたいと考えた。

【自己指導能力が高められた生徒像】

- (1) やろうとする意欲に燃えている
- (2) 問題の所在に気づき、正しい判断ができる
- (3) 目標を持ち、計画的に取り組む
- (4) 自分の役割を自覚し、責任を持って成しとげる
- (5) 積極的、継続的、協調的に問題に取り組む
- (6) 活動を評価し、修正することができる

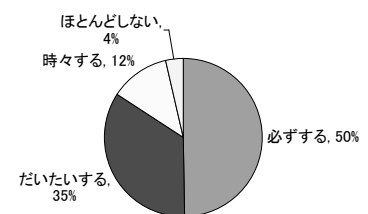
② 家庭・地域との連携の必要性

「一人一人の個性の伸長」「社会的な資質や能力・態度の育成」「社会的自己実現ができる資質・態度の形成」を行っていくためには、将来にわたって生きていく家庭や地域社会の中で自己指導能力の育成が行われる必要がある。

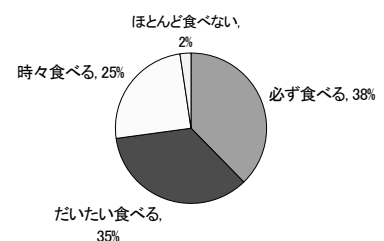
『宮崎ならではの教育』（宮崎県教育委員会 平成15年3月）の中でも、家庭はすべての教育の出発点であり、子どもの人間形成の基礎を培う上で重要な役割を担っていると述べられ、また、地域社会の中で年齢の異なる人たちとの交流や知恵の伝承や様々な生活体験、社会体験、自然体験を豊富に積み重ねることが自己指導能力を育成するために重要であると述べられている。

研究実践校で家庭での生徒の様子を調査した所、家庭での「あいさつ」や「礼儀」についての項目では、「おはよう」「おやすみ」のあいさつを「必ずする」と答えた生徒は 50%しかおらず、一方で、「時々する」「ほとんどしない」と答えた生徒は 20%近くいた。また、「いただきます」「ごちそうさま」についても同様の結果が得られた。「おはよう」「おやすみ」「いただきます」「ごちそうさま」の基本的なあいさつなど、家庭で「基本的な躰」が徹底されていない家庭も少なくない。また、夕食を家族そろって「必ず食べる」と答えた生徒は 38%であり、「時々」「まったく」と答えた生徒は 4 分の 1 を越えていた。この結果から、親子のコミュニケーションの不足があるのではないかと考えられる。

‘おはよう’や‘おやすみ’のあいさつをしますか？



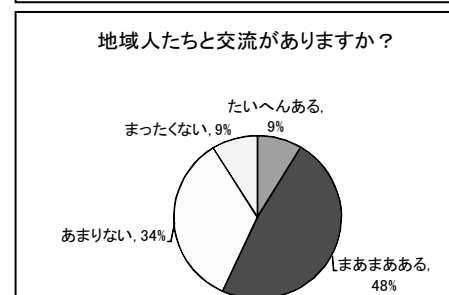
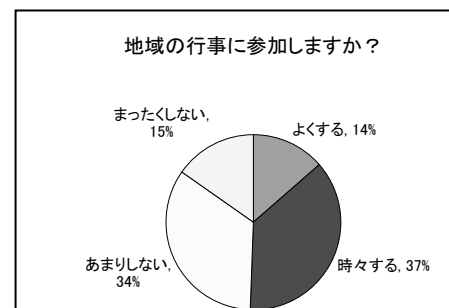
夕食は家族そろって食べますか？



生徒たちの家庭での様子に関するアンケート

また、地域との関わりについても調査してみると、「地域の行事に参加しますか。」という問いに対して、「あまりしない」「まったくしない」という生徒が49%いた。地域の人たちと交流がありますかという問いに対しても「あまりない」「まったくない」と答えた生徒が43%という結果になった。この結果から地域の教育力が生かされる場面が少なくなってきたことがわかる。

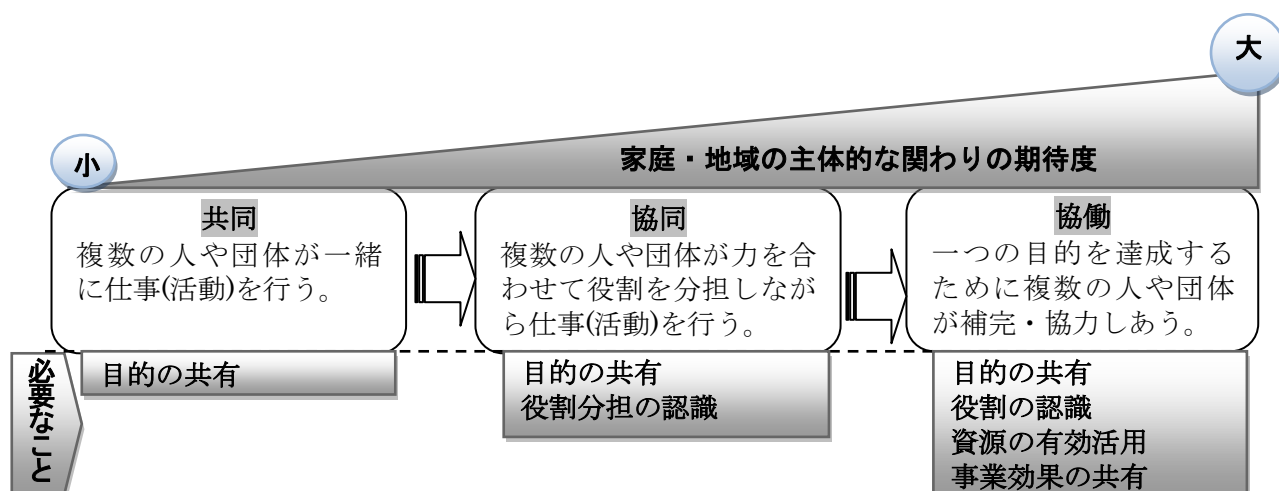
このような現状から、自己指導能力を育成していくためには、生徒の成長の様子や教育上の課題などの情報を家庭と学校が共有し、生徒たちの人間形成の基盤となる基本的な生活習慣の定着や善悪の判断などの基本的倫理観、社会的マナーなどを身につけさせることや、地域の子どもは地域で育てるという機運を高め、生徒たちが生活体験や社会体験、自然体験を豊富に積み上げていけるような環境づくりを模索していくことが極めて重要であると考えた。



生徒たちの家庭での様子に関するアンケート

③ 協働による連携の効果性・効率性

家庭・地域との連携を効果的・効率的に行うために、連携を三つの段階に分類し、分析を行った。



これまでも研究実践校では、家庭・地域との連携の必要性を認識し、連携に取り組んできた。しかし、これまでは、学校が主体となり企画・運営し、家庭や地域に参加を呼びかける“共同”や役割を分担し協力を依頼する“協同”であった。保護者や地域の方々は、好意的に協力してくださったが、企画段階では、携わってもらふ機会が少ないこともあり、主体的な関わりはあまり見られなかった。

その結果として、家庭・地域の教育力を十分に生かすことができなかった。また、管理職や担当の教職員の異動に伴い引継ぎが不十分だったり、当初の目的を見失い活動が停滞したり、学校の事情に左右されやすく活動を継続することが難しかった。

そこで、本研究では、学校・家庭・地域が、共通の目的に向かって互いの持つ資源を効果的に生かすことができるような連携を進めることで、それぞれの主体性が発揮されるだけでなく、相互に補完し合い、効果的・効率的に活動の成果を上げることができるのではないかと考え協働による連携を模索した。

協働の効果性・効率性

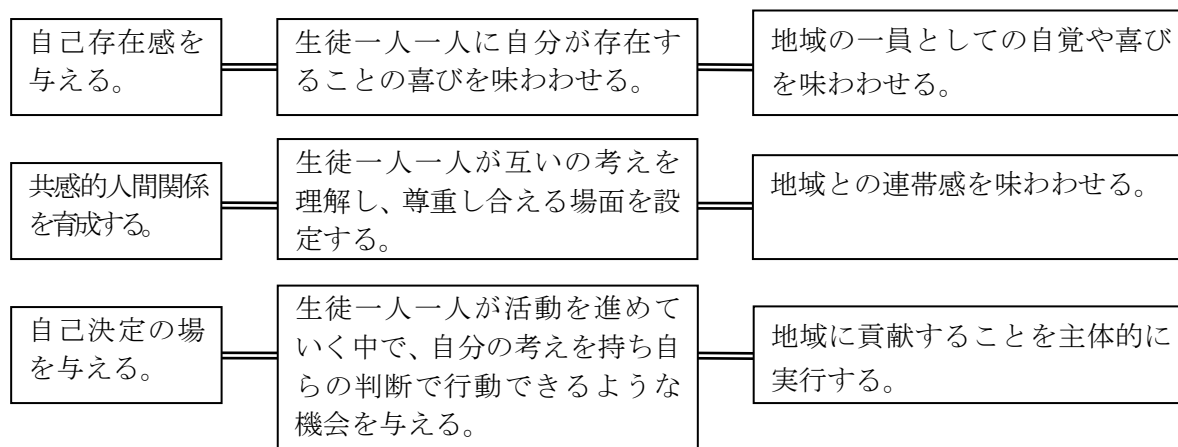
効果性	- それぞれの役割が明確になり、それぞれの団体が主体的に関わることができ活動を継続させ易い。 - それぞれの団体の使命や目的を満たすことができる。 - それぞれの不足を補うことができる。
効率性	- それぞれの持つ資源(人・物・機会・時間)を有効に活用できる。 - それぞれの団体の目的を達成するためにより積極的・主体的な関わりが期待でき、活動を年々発展させることができる。

(2) 家庭・地域との協働による生徒指導の機能を生かした教育活動の考え方

① 生徒指導の機能の考え方

生徒指導とは、『生徒指導の手引き』（昭和 56 年文部省）の中で「学校がその教育目標を達成するための重要な機能」とであると述べられている。すなわち、生徒の自己指導能力を育成するためには、生徒指導が教科指導や道徳、特別活動、その他あらゆる学校教育の場で機能していく必要がある。具体的には、全ての学校教育の場で、生徒に「共感的人間関係」を基盤に「自己存在感」「自己決定」の場を与えるといういわゆる生徒指導の機能が生かされることが必要である。

本研究では、家庭・地域との協働による生徒指導の機能を次のように考えた。



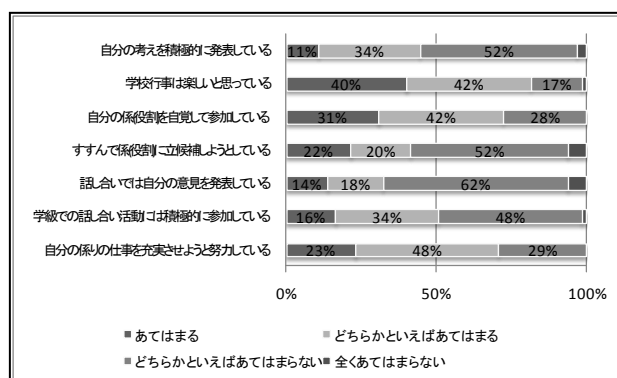
② 生徒の実態について

現在の学校生活の中で、生徒指導の機能がどの程度生かされているのか把握するために、研究実践校の全校生徒(490 名)を対象にアンケートを実施し、分析・検証をした。

ア 「自己存在感」について

自己存在感については、自分の考えを積極的に発表している生徒は、45%程度であり、また係活動への取組もあまり主体的とはいえない。自分の役割の自覚や積極性が不足しているという課題がわかった。

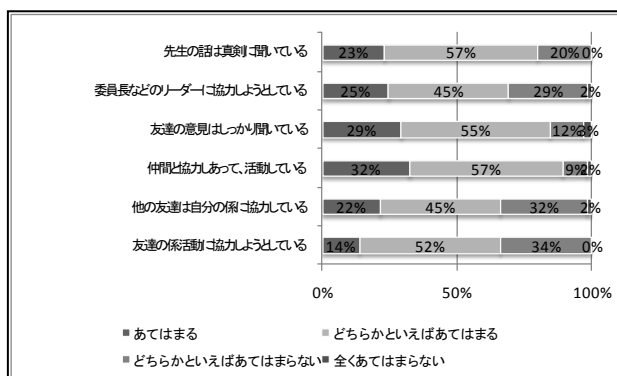
一人一人の役割の重要性に差がある場合があることや、一人一人の活動の指導や支援が行き届いてないことが考えられる。またリーダー格の生徒が固定されやすく、一部の生徒に任せきりになることも多い。



自己存在感に関するアンケート結果

イ 「共感的人間関係」について

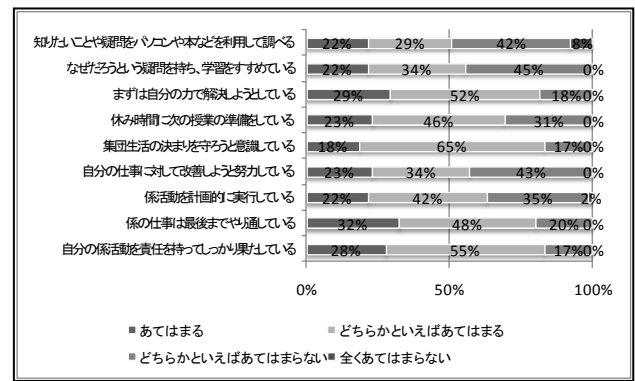
アンケートの結果を見ると、友達の見聞をしっかりと聞こうとする姿勢は比較的できている。また、「仲間と協力しあって、活動している」という項目は約 85%の生徒ができていると答えている。しかし、一方で係活動に関する項目では、協力し合うことはあまりできていないという結果がでている。このことからごく親しい仲間とは協力し合うことはできるが、集団の中で様々な人たちと協力し合いながら活動する態度はまだ育っていないことが分かる。



共感的人間関係に関するアンケート結果

ウ 「自己決定」について

アンケートの結果から、係活動などやるべきことが明確で、具体的な目標が立てやすい場面では、責任をもってやり遂げようとする態度がみられる。しかし計画的に取り組もうとする姿勢や自分の活動をさらによりよくするために工夫・改善する姿勢はまだ育っていないことがわかる。



自己決定に関するアンケート結果

③ 家庭・地域の資源を生かした指導の工夫・改善

生徒の実態をもとに、次のように指導する際の工夫・改善点とその際に生じる課題を整理した。また家庭・地域から得たい支援等を家庭・地域の持つ資源としてまとめた。

ア 「自己存在感」について

【指導の工夫・改善点と課題】

	工夫・改善点	課題
自己存在感	少人数のグループ活動を設定し、話し合いなどで意見が出やすい環境をつくる。また一人一人の役割と責任を明確にする。	・ 一人の教師が複数のグループを指導しなければならない。よりきめ細やかな指導を充実させるためには、複数の指導者が必要である。
	学級や学年の枠を取り除いた地区生徒会などの縦割りの活動を取り入れることで、上級学年の生徒のリーダー性を育み、また下級生にはリーダーの在り方について学ばせる。	・ 生徒一人一人の個性や特性を把握し、指導に生かすために、学校外での生徒の情報も知る必要がある。 ・ 地区生徒会の活動を充実させるために、担当する地区のさまざまな情報を得る必要がある。

【家庭・地域の持つ資源】

課題解決に応える資源

- 指導をサポートする人材
- 生徒の地域での様子や家庭環境などの情報
- 地域の情報



直接、自己存在感に繋がる資源

- 地域の一員としての自覚や喜びを味わわせる体験
 - ・ 地域の人たちからの賞賛をもらう。
 - ・ 地域の人たちに顔や名前を覚えてもらう。
 - ・ 地域のためにできることを知る。

イ 「共感的人間関係」について

【指導の工夫・改善点と課題】

	工夫・改善点	課題
共感的人間関係	個人やグループなどの目標を掲げさせ、共通の課題意識をもった活動を取り入れる。また活動の成果を発表する場面を設け、仲間とやり遂げたという充実感を持たせる。	・ 課題に主体的に取り組ませるためには、身近な生活に即した課題と目標を持たせたい。 ・ 生徒に充実感を持たせるために、できるだけ多くの人たちに活動の成果を知ってもらう機会が欲しい。
	地域の人々との交流や異年齢集団との交流やお互いを認め合う交流を通して、社会と関わりながら豊かな人間関係を築かせる。	・ 社会と関わり交流をする機会や交流するための情報が欲しい。

【家庭・地域の持つ資源】

課題解決に依る資源

- 地域社会に根ざした学習課題の提供
- 活動の成果を発表する機会の提供
- 交流する機会や情報の提供



直接、共感的人間関係に繋がる資源

- 地域との連帯感を味わわせる体験
 - ・ 地域の人たちとコミュニケーションを図る。
 - ・ 地域の人たちと感動を共有する。

ウ 「自己決定」について

【指導の工夫・改善と課題】

	工夫・改善点	課題
自己決定	課題を解決するために、自分たちで主体的に調査や観察・実験する場面を設定する。	・ 調査や観察・実験をする際の素材や情報の提供、それをサポートする援助者が欲しい。
	様々な価値観や人生観に触れさせ、自分の生き方をみつめさせることで、よりよく生きていこうとする態度を育てる。	・ 生徒たちに様々な価値観や人生観に触れさせるてくれる人材や機会が欲しい。

【家庭・地域から得たい資源】

課題解決に依る資源

- 調査や観察・実験の支援。
- 様々な価値観や人生観に触れる機会。



直接、自己存在感に繋がる資源

- 地域に貢献しようとする意欲や態度が身につくこと。
 - ・ 地域のために何をすべきかに気付く。

(3) 協働を成功させるための留意点

① 協働の原則

小林市が示している「市民協働の手引き」(2009年)を基に、協働を成功させるための5つの原則を設定した。

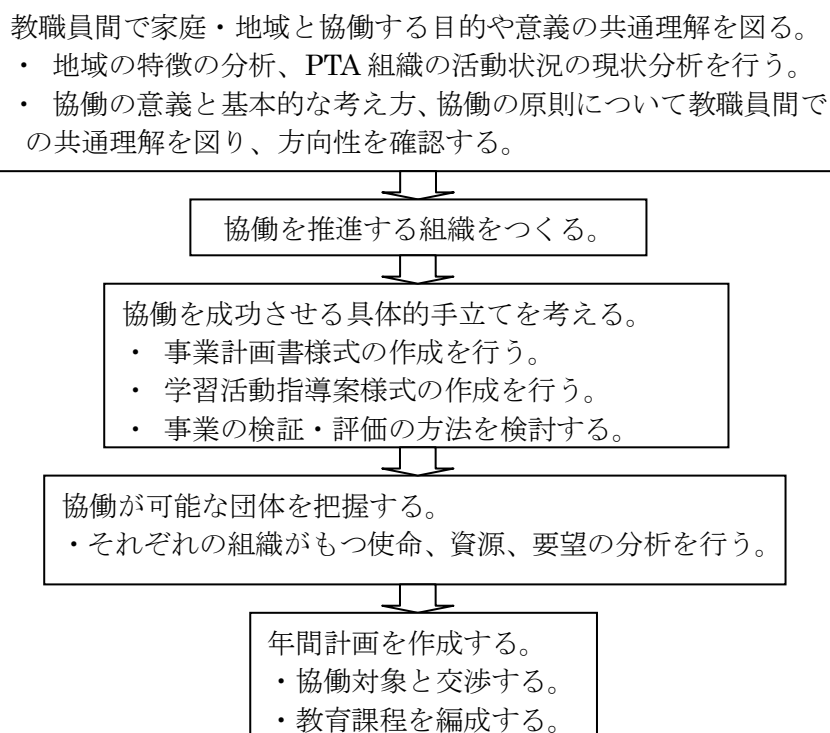
【協働の5つの原則】

- ① 目的・目標の共有
協働しようとする事業の目的と目標を相互に共有する必要がある。
- ② 自主・自立
お互いに依存することなく、自分たちには何ができるのかという視点で課題に取り組み、協働することで、それぞれの主体性や専門性を高める。
- ③ 相互理解・互譲の精神
活発な情報交換をし、相手の立場や特性、長所・短所を理解し尊重することで、適切な役割分担を図り、共通の課題に取り組むパートナーであることを認識しあう。相手の立場を尊重する互譲の精神、思いやりを持つことが必要である。
- ④ 情報の共有
団体の活動目的や活動状況などを情報提供する機会や手段を自ら充実させることが必要である。
また課題などの情報を積極的に収集し、それぞれが発信した情報を共有することも必要である。
- ⑤ 意識の醸成と組織・体制の整備、検証・評価
様々な団体と連携・協働を推進しやすい組織・体制の整備・充実を図ることが大切である。
また活動を持続させるには、常に検証・評価を行う。

② 協働を実施するまでに必要な手立て

協働による生徒指導の機能を生かした学習活動を実施するためには、協働を実施する際の課題の把握や教職員間での共通理解やアドバイザー的役割を果たす組織づくりなど事前の準備が大切である。

そこで、協働を実施するまでに必要な手立てを次のように考えた。



③ 協働を推進する組織づくりの視点

協働を実施するためには、学校・家庭・地域の情報の共有や地域社会とのネットワークづくりがかかせない。そのためには、協働を推進するアドバイザー的役割を果たす組織が必要である。

そこで、組織づくりの4つの視点を次のように考えた。

1つ目は、新しい組織を立ち上げるのではなく、できるだけ既存の組織を活用することである。多くの学校には、PTAや地域の代表の方々が関わる生徒の健全育成を目的とした組織があるのではないだろうか。既存の組織を改善し、生かしていくことで組織を新たに立ち上げ運営する労力を軽減できると考えた。

2つ目は、学校、家庭、地域の情報が共有でき、地域の中で広い人脈を持つ人材で構成することである。学校評議員や地域に根ざした活動をされている人材を活用することが必要である。

3つ目は、適正な人数を工夫することである。学校、家庭、地域の代表がバランスよく人選されることが望ましいと考えた。また人数が多くならないように配慮し、会を開く日程の調整など会の運営がしやすいようにしておくことが大切である。

4つ目は、規約を作成もしくは修正し、目的や役割を明確にすることである。会が何を目的としているのか、委員のそれぞれの役割は何かなどを共通理解するだけでなく、教職員の異動などにともなって担当者が変わった際に引継ぎを確実にを行うことができる。

④ 協働が可能な団体を把握する視点

協働が可能な団体を把握するための2つの視点を次のように考えた。

1つ目は、地域に根ざし、地域のための活動を行っている団体や生涯学習の視点で活動を行っている団体である。このような活動を行っている団体の取組は、総合的な学習や学校行事などに生かすことができ、教育課程に位置付けることができるものが多いと考えた。

2つ目は、団体の持つ使命や資源が学校の要望を満たすことができ、且つ学校の持つ使命や資源がその団体の要望を満たすことができることである。協働を行うことで、それぞれの要望が満たされることが、それぞれの主体性を引き出すことや活動を継続、発展させることにつながると思った。

2 協働を実施するための体制づくり

(1) 協働を推進する組織づくり

本研究では、協働を推進するための組織として、健全育成委員会を活用した。委員の構成、実施回数と時期、会の規約を改正し、協働を実践する際に学校・家庭・地域の情報の共有やアドバイスが得られるようにした。

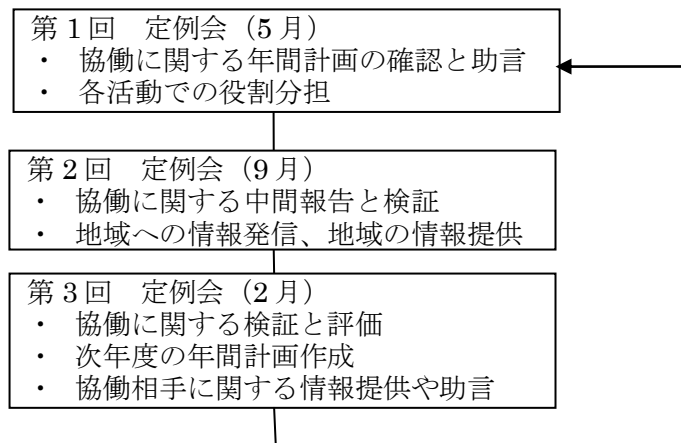
【主な改善点】

旧
① 構成メンバー(19名) 校長、教頭、教務主任、生徒指導主事、PTA 会長、副会長(5名)、学校評議員、主任児童委員
② 実施時期・回数等 2月・年1回
③ 主な内容 ・ 1年間の学校の運営報告 ・ 学校の現状と課題についての情報発信

* 太字は変更点を表す

新
① 構成メンバー(13名) 校長、教頭、教務主任、生徒指導主事、PTA 会長、 副会長(地区育成部担当)、地区育成部長、学校評議員、地域に根ざした活動をしている人材(2名)
② 実施時期・回数等 5月、9月、2月・年3回 * 必要に応じて臨時に召集することもある
③ 主な内容 ・ 学校・家庭・地域の情報の共有 ・ 協働に対するアドバイス

【年3回の定例会の位置づけ】

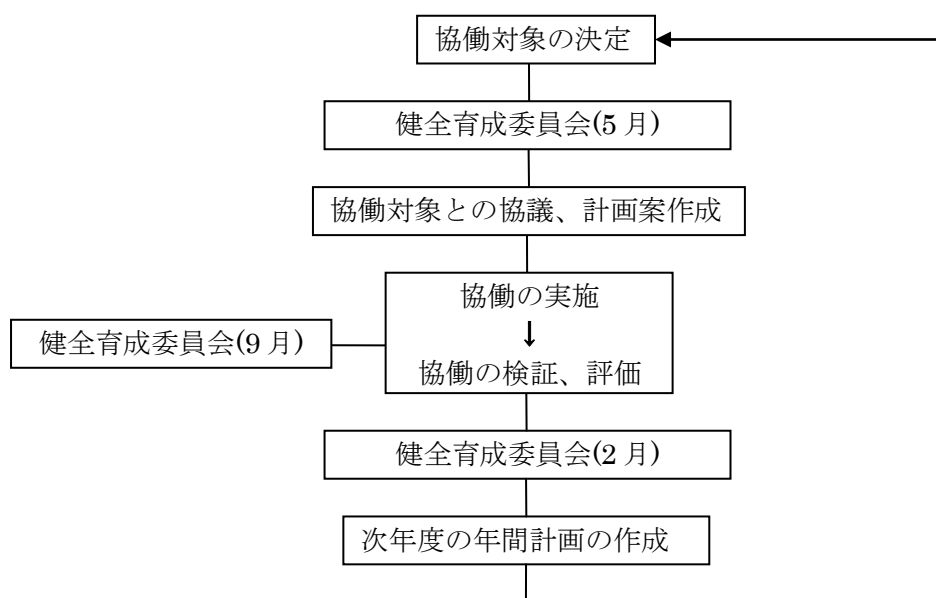


【新たに作成した規約】

小林中学校健全育成委員会 規約	
(目的)	
第1条	本会は、学校、家庭、地域との協働や連携により、生徒の健やかな成長を図るとともに地域の活性化、発展に貢献する人材を育成することを目的とする。
2	校長は、自らの権限と責任において学校運営に関する必要な事項を決定するにあたり、必要とする事項について、委員に意見を求め、参考とする。
(活動)	
第2条	本会は目的を達成するため、次に掲げる活動を行う。 (1) 学校、家庭、地域の情報を幅広く収集および提供し、地域の情報の共有化を図るために、定例会を年3回開催する。(5月、9月、2月) (2) 必要に応じて臨時会を開催する。 (3) 必要に応じて、協働を行う組織や団体との橋渡しを行う。 (4) 協働や連携を行う際に、それぞれの役割に応じて、中心的立場となって活動する。
(構成)	
第3条	委員の定数は、13名とする。
2	委員は、下記のとおり構成する (1) 教職員(4名) 校長、教頭、教務主任、生徒指導主事 (2) PTA役員(3名) PTA会長、副会長(地区育成部担当)、地区育成部長 (3) 学校評議員(5名) (4) 地域人材(2名)
(任期)	
第4条	委員の任期は、委嘱の日から当該年度末までとする。ただし、再任を妨げない。
(役割)	
第5条	委員の役割は、次のとおりとする。 (1) 学校長は本会を代表し、会務を統括し、総会を招集する。 (2) PTA会長は、PTA組織の統括を図るとともに、PTAのOB組織との協働を推進する。 (3) 教頭は事務局として、文書作成、発送や会の運営を行う。PTA副会長はこれを補佐する。 (4) 生徒指導主事は、警察署や児童相談所などの公的機関との情報交換に努める。生徒会との連携を図る。 (5) 教務主任は、教育課程の調整を図り、職員会での共通理解、共通実践を図る。 (6) PTA地区育成部長は、地区育成部、保護者との共通理解、共通実践を図る。 (7) 学校評議員は、区長会や地域住民との協働や連携を推進する。 (8) 地域人材から登用した委員は、それぞれの特色を生かし、協働や連携を推進する。

(2) 協働を実施する年間の流れ

継続的、発展的な協働を実施するために年間の流れを作成した。協働を実施した後は、必ずお互いの目的を達成できたかの検証と評価を行い、次年度の活動に反映させる。



(3) 協働の原則に迫る手立て

① 協働事業計画書の作成

協働を実施する際に、協働対象と事業目的や内容の共有ができるように協働事業計画書を作成した。各団体の要望と持っている資源を明らかにすることで、それぞれの役割を明確にし、それぞれが主体的に関われるようにした。

協働事業計画書

①事業名			
②事業目的			
③協働する団体のこの事業に関連した使命 (Mission)			
	団体名	使命(Mission)	
ア			
イ			
ウ			
④事業内容			
⑤協働する団体のそれぞれの要望 (Needs) ・ 資源 (Resources)			
	団体名	要望(Needs)	資源(Resources)
ア			
イ			
ウ			
⑥事業の効果			
⑦事業実施スケジュール			
	年月日	内容	

協働しようとする事業の目的と目標を相互に共有する

【① 目的・目標の共有】

それぞれが必要としていることやできることを理解し、役割分担を明確にする。また、事業で得られる効果を明確にする。

【② 自主・自立、③ 相互理解、互譲の精神】

活動状況など確認したり、情報を共有したりする機会や手段を明確にしておく。

【④ 情報の共有】

② 学習活動指導案様式の作成

〇〇学習活動指導案

1 目標

- (1)
- (2)
- (3)

生徒指導の三機能に合わせて3観点で学校の立場で生徒主体に書く。地域との協働との関連がわかるようにする。【① 目的・目標の共有】

2 各団体の目的と役割

団体名	目的	役割
学校	それぞれの目的を相互に共有する。 【① 目的・目標の共有】	それぞれの持つ資源を明らかにし、役割を共有する。 【② 自主・自立】

2 日程

月 日(曜)	校時	内容	備考
		活動状況、課題などの共有を図ることも考えて、事前事後の日程を考える。【④ 情報の共有】	
		活動を振り返る場面も設定する。 【⑤ 意識の醸成と組織・体制の整備、検証・評価】	

3 役割分担

教職員や地域の方の役割分担をそれぞれの特性を生かして具体的に考える。

【③ 相互理解・互譲の精神】

4 活動の流れ

(1) 事前活動：〇月〇日(〇曜日)〇校時(場所)

*場面 A…自己存在感を与える B…共感的人間関係を育成する C…自己決定を行う

時間	生徒の活動	教師の指導・支援	場面	地域の方々の動き

(2) 当日：〇月〇日(〇曜日)〇校時(場所)

*場面 A…自己存在感を与える B…共感的人間関係を育成する C…自己決定を行う

時間	生徒の活動	教師の指導・支援	場面	地域の方々の動き
	活動の目的は四角で囲む。	予想される生徒の反応などを的確に予想し、生徒指導の機能が活かされるようにしておく		教職員以外の方々の動きと目的が具体的にわかるようにする。 【② 自主・自立、 ③ 相互理解・互譲の精神】

*服装→体育服、ジャージ、軍手

(3) 事後指導：〇月〇日(〇曜日)〇校時

生徒指導の三機能を活かす場面を数字で記す。

- A 自己存在感を与える場面
- B 共感的人間関係を育成する場面
- C 自己決定を行う場面

③ 協働事業ふりかえりシートの作成

事業の成果やプロセスをふりかえり、検証・評価することで、事業を継続させたり、他の事業に生かしたりするために「協働事業ふりかえりシート」を作成した。協働による事業が終了後に各団体で話し合う機会を設けてもらい、シートを記入し提出してもらう。健全育成委員会の資料として活用する。

【⑤意識の醸成と組織・体制の整備、検証・評価】

協働事業ふりかえりシート

事業名		団体名		記入年月日	
事業内容					
段階	項目			評価	
計画段階	1 事業の目的は明確でしたか。 目的[]			ア はい イ いいえ	
	2 事業の目的・目標を共有できましたか。			ア はい イ いいえ	
	3 なぜ協働で行うのか、理由は明確でしたか。			ア はい イ いいえ	
	4 協働するパートナーを選ぶ理由は明確でしたか。			ア はい イ いいえ	
	5 事業計画をともに作る事ができましたか。			ア はい イ いいえ	
	6 事業において、お互いの特性を活かせる役割分担をしましたか。			ア はい イ いいえ	
	7 対等な関係を築くため、相互を理解し合う場が持てましたか。			ア はい イ いいえ	
実施段階	解決策案				
	8 役割分担をともに共有し、役割を果たしましたか。			ア はい イ いいえ	
	9 進捗状況や事業に関する情報を共有しましたか。			ア はい イ いいえ	
	10 問題や課題が発生したときには、お互いに連絡をとりあい素早く対応できましたか。			ア はい イ いいえ	
	11 企画の修正は、お互いに十分議論し、柔軟に対応できましたか。			ア はい イ いいえ	
事業終了後	解決策案				
	12 目的・目標は達成できましたか。			ア はい イ いいえ	
	13 協働した成果はありましたか。			ア 十分 イ 少し ウ 不十分	
	14 次年度も協働したいですか。			ア はい イ いいえ	
解決策案					
事業をふりかえっての感想等					

① 目的・目標の共有

② 自主・自立

③ 相互理解・互譲の精神

④ 情報の共有

⑤ 意識の醸成と組織・体制の整備、検証・評価

(4) 協働が可能な団体の把握

健全育成委員会の委員に助言をもらいながら、協働が可能な団体を明らかにした。

団体名	使命(Mission)	主な資源(Resources)	主な要望(Needs)
小林市生活環境課	ごみ収集。環境保全。生活環境の整備。	市内一斉清掃の計画・立案 予算	小・中学生の参加率をあげたい。
社会福祉協議会	地域福祉の推進を積極的に図る。	各団体とのネットワーク	地域のネットワークをつくりたい。
小林市区長会 連絡協議会	家庭、地域の環境美化運動や住みよい地域をつくるための奉仕作業。地域の交流を盛んにする。	地域の情報 行政とのつながり	地域の行事や活動を盛り上げたい。 住みよい地域をつくりたい。
小林市青年団 協議会	地域との交流、明るく活力ある郷土づくり。	青年団のネットワーク	青年団活動への参加と協力をして欲しい。
西諸こげんす会	市民参加型の web ページ運営と情報発信を通して各団体の活動をサポートする	地域への情報発信	web ページに参加してくれる市民を増やしたい。
郷土芸能保存会 連合会	民俗芸能の保存と後継者育成。	民族芸能に関する知識 地域の伝統に関する知識	民族芸能や地域の伝統について知って欲しい。後継者を育てたい。
老人クラブ 連合会	会員及び家族、地域社会の幸せづくり。	地域の歴史や伝統の知識 生活の知恵	会員の孤独感解消、精神的な安らぎや生きがいとを感じる活動をしたい。
おもしろ発見塾	自らの生涯学習と研究発表を通して市民の郷土愛の醸成。	地域に根ざした学問、文化に関する知識	活動の場が欲しい。 参加者を増やしたい。

3 協働による生徒指導の機能を生かした教育活動の実践

(1) 検証授業の概要

① 協働事業計画書

協働事業計画書

①事業名 地区一斉清掃			
②事業目的			
(1) 地域の一員としての自覚を促し、自分の役割をきちんと果たそうとする態度を育てる。 (2) 地域の方々とお互いに協力し合い助け合うことで、豊かな人間関係を築こうとする態度を育てる。 (3) 自らすすんで地域に貢献しようとする態度を育てる。			
③協働する団体のこの事業に関連した使命(Mission)			
	団体名	使命(Mission)	
ア	学校	地域の一員としての自覚や喜びを味わわせ、地域に貢献しようとする態度を育てる。	
イ	小林市青年団協議会	① 次代の担い手として、自主的活動に基づき地域との交流を深め、明るく活力ある郷土の構築に寄与する。 ② 青年期に期待される人間像の確立をめざし、青年の資質の向上に寄与する。	
ウ	小林市区長会連絡協議会	① 家庭、地域の環境美化運動。 ② 住みよい地域をつくるための奉仕作業。 ③ 高齢者、壮年、婦人青少年(子ども会、青年団)活動を盛んにするための事業。	
④事業内容			
生徒たちが、自分たちの住んでいる地域の住民と交流を図りながら、地域の清掃活動を行う。			
⑤協働する団体のそれぞれの要望(Needs)・資源(Resources)			
	団体名	要望(Needs)	資源(Resources)
ア	学校	① 地域のよさに触れさせたい。 ② 指導をサポートして欲しい。 ③ できるだけ多くの人たちと交流したい。 ④ 地域に貢献できる場を提供して欲しい。	① 人材(生徒、教職員、保護者) ② 生徒の指導
イ	小林市青年団協議会	① 地域の方々や子どもたちに青年団活動を広め、様々な活動に参加・協力をして欲しい。 ② 次代の後継者を育てたい。	① 地域に貢献する活動の経験 ② 人材(青年団員、若者)
ウ	小林市区長会連絡協議会	① 地区の行事や活動に、子どもたちや若い世代にもっと参加して欲しい。 ② 地域の環境美化を行いたい。	① 地域の情報 ② 人材(地区住民) ③ 行政等とのつながり
⑥事業の効果			
○ 生徒たちに地域の一員としての自覚が芽生え、地域に貢献しようとする態度が育まれる。 ○ 生徒たちに青年団活動を広めることができる。活動への参加者、協力者が増える。(小林市青年団協議会) ○ 地域の環境美化ができる。若い世代、生徒の参加者が増える。(小林市区長会連絡協議会)			
⑦事業実施スケジュール			
年月日		内容	
10月14日(水)		○ 各団体代表との協働事業計画書の作成と確認	
11月4日(水)		○ 担当者打ち合わせ会を行い、情報交換、計画の作成、役割分担を行う。	
11月5日(木)		○ 事前学習(オリエンテーション、地区一斉清掃計画作成)を行う。	
11月5日(木)～10日(火)		○ 各団体で、当日の参加の呼びかけ、広報活動を行う。 ＊小林中健全育成委員会の協力も得る。	
11月11日(水)		○ 地区一斉清掃の実施。活動終了後は各団体で活動反省を行い、ふりかえりシートを事務局(小林中学校 教頭)に提出をする。	
11月下旬		○ 報告会を行い、活動の成果、課題を洗い出し、次年度の方向性を見出す。	

② 学習指導案

総合的な学習「地区一斉清掃」指導案

1 目 標

- (1) 地域の一員としての自覚をもち、自分の役割をきちんと果たそうとする態度を身に付ける。
- (2) 地域の方々とお互いに協力し合い助け合うことで、豊かな人間関係を築こうとする態度を身に付ける。
- (3) 自らすすんで地域に貢献しようとする態度を養う。

2 各団体の目的と役割

団体名	目的	役割
学校	地域の一員としての自覚や喜びを味わわせ、地域に貢献しようとする態度を育てる。	① 保護者へ参加を呼びかける。 ② 生徒の指導・支援を行う。 ③ 活動計画を作成する。(生徒への支援)
小林市青年団協議会	① 次代の担い手として、自主的活動に基づき地域との交流を深め、明るく活力ある郷土の構築に寄与する。 ② 青年期に期待される人間像の確立をめざし、青年の資質の向上に寄与する。	① 地域に貢献する活動の意義や経験を生徒や教職員に伝達する。 ② 生徒たちが活動計画を作成する際の補助を行う。 ③ 青年団のネットワークを活用して地域住民に参加を呼びかける。
小林市区長会連絡協議会	① 家庭、地域の環境美化運動。 ② 住みよい地域をつくるための奉仕作業を推進する。 ③ 高齢者、壮年、婦人青少年(子ども会、青年団)活動を盛んにするための事業を実施する。	① 清掃場所や内容のアドバイスをする。 ② 地域の住民へ参加を呼びかける。 ③ 行政との連携を図る。

3 日 程

月 日(曜)	校時	内容	備考
10月14日(水)		第1回担当者打合せ会 (協働事業計画書の検討)	
11月4日(水)		第2回担当者打合せ会 (指導案の検討)	
11月5日(木)	6校時	オリエンテーション、清掃計画作成	協働事業
11月11日(水)	5,6校時	地区一斉清掃	協働事業
11月12日(木)	帰りの会	自己評価、感想文作成	
11月27日(金)		第3回担当者打合せ会 (検証・評価)	

4 役割分担

	役割	内容	担当分掌等	責任者
1	渉外担当	協働対象との連絡調整等	教務部	〇〇
2	進行	事前学習・当日の全体の進行	教務部	〇〇
3	地域への広報①	回覧板等を使つての広報活動	区長会	〇〇区長
4	地域への広報②	青年団のネットワークを使つての広報	青年団	〇〇会長
5	集団行動指導	交通指導計画作成、集団指導、服装等の指導	生徒指導部	〇〇
6	各区長との連携	各地区の区長と調整	各地区担当	〇〇教頭
7	後片付け計画	ごみの処理方法などの計画作成	区長会	〇〇区長
8	諸注意	各地区で危険箇所などの諸注意	各区長	

5 活動の流れ

(1) 事前活動：11月5日(木)6校時(体育館)

*場面 A…自己存在感を与える B…共感的人間関係を育成する C…自己決定を行う

時間	生徒の活動	教師の指導・支援	場面	地域の方々の動き
14:45	体育館移動(集団行動) 全校集会の要領で整列・黙想・開始する。	○集団行動の要領で速やかに体育館への移動を促す。 ○所定の場所で指導を行う。		
14:55	オリエンテーション 「地域の貢献について考えよう。」 担当：武田			
	(1)地域のよさや地域との関わりの実態を知る。	○アンケート結果などを用いて地域のよさを紹介する。 ○アンケート結果を用いて地域の一員としての自分を見つめさせる。 ○プレゼンテーションを使い視覚的に説明する。	A	
15:25	(2)地域に貢献している先輩の話を聞く。 ・地域に貢献する活動の意義や青年団の方の想いを知る。 ・青年団活動の内容を知る。	○話を聞く態度を指導する。 ○必要があればワークシートにメモをするように助言する。	B B C	○青年団活動の具体的な活動内容や地域に貢献する活動の意義や気持ちを紹介する。 ○青年団活動への参加や協力を呼びかける。
15:35	(3)地区一斉清掃のねらいを理解する。			
15:40	地区一斉清掃計画 ・各地区で班編成を行う。	○男女数、学年等のバランスが良くなるように配慮する。		
15:45	・活動内容を考えワークシートに記入する。(個人) ・隣の友達と意見交換する。(ペア) ・各班で活動内容を発表し決める。(班) ・役割分担を行う。	○考えのまとまらない生徒には助言を与える。 ○友達の考えを否定しないように指導する。 ○教師主導にならないように配慮し、助言を与えながら生徒の主体性を引き出すように工夫する。	C B B C	○各地区を巡回しながら活動計画を立てる際のアドバイスをする。 ○事前に各地区の区長は清掃して欲しい場所などの情報を提供する。
		○一人一人の役割を明確にする。	A	
		○服装、用具の分担ができているかなどを班長に確認する。	A	○活動地区で用意できるものを生徒に知らせる。
15:55	まとめを行う。 ・準備物等を確認する。 ・活動のふりかえりを行う。	○ワークシートに記入するように指示をする。	A	○生徒の立てた計画に賞賛を与え、集会所や活動の際の注意事項を伝える。
16:00	解散(各地区ごと)。			

(2) 当日：11月11日(水)5、6校時

*場面 A…自己存在感を与える B…共感的人間関係を育成する C…自己決定を行う

時間	生徒の活動	教師の指導・支援	場面	地域の方々の動き
13:55	運動場に集合する。 (地区ごとに整列する)	○各地区担当の職員はグラ ンドに、担当地区の生徒を 集合・整列させる。		
14:00	先生の説明を聞く。 ・地区一斉清掃の目的を 確認する。 ・注意事項を確認する。	○全体指導を行う。 (教務部、生徒指導部)		
14:10	移動(集団下校)	○交通安全についての指導 を行う。 ○移動の際に危険と思われ る場所を事前に把握し、そ の場所の指導を行う。		○集合場所周辺の安全確 認や指導を行う。 ○区長は、参加住民への説 明や役割分担を行う。
14:50	各地区に集合	○集合場所で区長と最終打 ち合わせを行う。		
15:00	開始式 ・地区代表生徒あいさつ ・地域代表のあいさつ	○代表生徒の事前指導をし ておく。 ○区長に事前に打診してお く。	A C B	○地区長としての地区へ の想いや現状を語る。 ○危険箇所などの事前指 導を行う。
15:15	先生から 清掃活動開始 ワークシートに記入 した目標を確認す る。	○各班の目標を確認する。 ○活動の様子を記録する。 (デジカメ、記録用紙) ○各班の目標が達成でき るように支援を行う。	A B C	○助言を与え、できるだけ 生徒の主体的な活動を 促す。
16:05	清掃用具などの後片付け をする ・活動場所の見届けを行 う。	○ゴミの始末の確認を行う。	C A	○ごみの処理の方法を指 示する。
16:15	終了式 ・地域代表の講評 ・生徒代表あいさつ	○区長に事前に打診をして おく。 ○事前指導を行う。 ○代表生徒は開始式とは別 の生徒にする。	A B C	○講評をし、活動に称賛を 与える。
16:25	先生から 解散	○交通事故に留意させる。 ○活動場所の見届けを行う。 ○参加して下さった地域 の方へのあいさつをする。		○区長は地区担当の教職 員と簡単な活動の振り 返りを行う。

*服装→体育服、ジャージ、軍手

(3) 事後指導：11月12日(木)帰りの会

- 自己評価を行い、感想文を書く。
- 生徒集会で地域の方々の感想を紹介する。

(2) 自己存在感について

① 具体的な手立て

	それぞれの団体の主体的な関わり等	生かされた資源
学校	○ 地区生徒会を機能させ、各地区に分けて活動を行わせた。さらに、7名～9名の班活動を取り入れることで、一人一人の役割を明確にできるように配慮した。 ○ 事前学習で、生徒たちにアンケートを実施し、その結果を示しながら、地域のよさを見つめさせ、また地域との関わりを示すことで、地域の一員として自分たちの課題は何かを考える時間を設けた。	
小林市青年団協議会	○ 事前学習で、今までの青年団の主催する行事に参加したことがあるかを問いかけ、参加したことがある生徒たちに、参加してくれたことに対する想いや感謝の気持ちを伝えた。	地域に貢献する活動の経験
小林市区長会連絡協議会	○ 各班に担当者を配置し、生徒たちに具体的な指示や助言を行った。 ○ 積極的に生徒たちに賞賛を与えた。	人材(地区住民)行政とのつながり

② 活動の様子

事前学習では、青年団の方が全校生徒の前で、今までに活動に参加してくれた生徒を紹介した。紹介された生徒たちは照れた様子もみられたが、学習終了後は、青年団の方と談笑する姿も見られた。

当日は、班長を中心に、自分たちで立てた活動内容に従って主体的に清掃活動に取り組む様子が見られた。区長の指示で地区住民の方々も各班に割り当てられており、それぞれが生徒たちに清掃して欲しい箇所の要望や助言を与えていた。生徒たちは、地域の方々の要望に応えようと一生懸命活動に取り組んでいた。

また活動終了後は、地域の代表の方が活動の総括をされ活動した生徒たちに賞賛していただいた。地区によっては、生徒たちへのお礼の意味をこめてジュースなどを差し入れてくださる地区もあり、地域に貢献できた喜びを感じた生徒が多かったようである。



地域の方が指示を行う様子



地域の方が活動の総括と賞賛を行う様子

最初は、地区一斉清掃をやりたくなかったけど、ごみ拾いはじめて、いつも、そこで見えてなかったごみもよく見えた。たくさんのごみが落ちていて、拾ううちに、やりたくなかった気持ちもなくなってきた。ごみを拾っていると、地域の人たちから「ありがとう。」と言われて、すごく気持ちよくなりました。地区一斉清掃はすごく充実してよかったです。

生徒の感想

(3) 共感的人間関係について

① 具体的な手立て

	それぞれの団体の主体的な関わり等	生かされた資源
学校	○ 各班の目標を立てさせ、活動の成果を共有させる。	
小林市青年団協議会	○ 事前学習で今までの青年団活動を紹介し、青年団活動に参加しようと考えたきっかけや、地域に貢献したという達成感を得たときの経験を語った。 ○ 活動に参加し、生徒たち共に活動を行う。	地域に貢献する活動の経験 人材(若い世代)
小林市区長会連絡協議会	○ 積極的に生徒たちとコミュニケーションを図りながら共に清掃活動に取り組む。	人材（地域住民）

② 活動の様子

事前学習で、青年団会長に青年団活動に携わろうと思った経緯や 実際の活動の様子、地域に貢献していると感じたときの気持ちなどを語っていただいた。生徒たちは、熱心に話を聞いていた。

また、当日の活動では、地域の方々が積極的に生徒たちに話かけてくださる様子がみられ「あなたは〇〇さんとこのお孫さん?」「お父さんは、〇〇さんだね。」などの会話がよく聞こえてきた。地域の方々が身近な存在に感じた生徒も多かったようである。



事前学習で青年団活動に対する想いを語っている様子

引こしたばかりで、近所の方々とのお付き合いがほとんどありませんでした。今回の地区一斉清掃で、色々な方とお話しができました。
また、みどり会館が、掃除する前と比べてとてもきれいになった感じがしました。よかったです。これからも、このような活動があれば積極的に参加していきたいと思いました。

◎ たぶん、ゴミが落ちていて、めんどくさい。
昨年の、ゴミが多かったの、ねんねんねん...
自分の地域がきれいになって、とても嬉しいと思います!!
これからも、積極的に参加していきたいです!!
そして、これに地域の元氣を、感謝したい気持ちでいっぱいです!!

生徒の感想



地域の人とコミュニケーションをとる様子

(4) 自己決定について

① 具体的な手立て

	それぞれの団体の主体的な関わり等	生かされた資源
学校	○ 活動目標、活動計画を生徒たちが主体的に立てることができるように支援を行う。	
小林市青年団協議会	○ 地域に貢献する活動をする際の助言を行う。 ○ 活動計画を立てる際の支援を行う。	地域に貢献する活動の貢献
小林市区長会連絡協議会	○ 清掃場所や内容に関する地域の要望や助言を行う。 ○ 小林市のごみの分別方法を説明し、集めたごみの分別を实践させる。	地域の情報 行政とのつながり

② 活動の様子

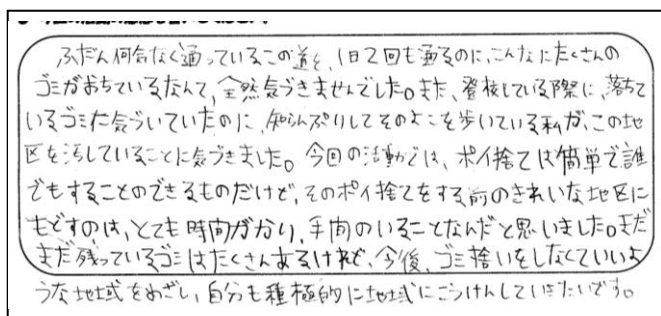
ごみを分別する際には、地区のごみ分別を担当している方が、「家庭でも自分たちで分別してくださいね。」と言いながら分別の仕方をご指導していただいた。

生徒たちは、自分たちが集めたごみを地域の方々に尋ねながら分別をしていた。

活動終了後の感想では、ごみのポイ捨てが多い現状に気づいた生徒が多く、「自分は絶対にしないようにする」という意見や「ごみを減らすために自分たちができることを考えていきたい」などのコメントが多く見られた。



ゴミの分別の仕方を教えてもらっている様子



生徒の感想



地域の方とゴミを分別している様子

(5) その他の主体的な関わり

	主体的な関わり	生かされた資源
小林市青年団協議会	○ 小林市の活性化のために今年度青年団が主催する行事への参加を呼びかける広報活動を行った。	青年団のネットワーク
小林市区長会連絡協議会	○ 市に連絡をとり、収集したごみの回収を依頼した。 ○ 市の広報誌で活動の様子を紹介した。	行政とのつながり



区長会の働きかけで行われた市の生活環境課による
ゴミの回収

**清掃活動で地域社会
とつながりを深める**

真方二区の水の手橋で元気に清掃作業を行う生徒達。

11月20日、小林中の生徒が地区一斉清掃を行いました。これは「家庭・地域社会と学校との連携」を目的に地域の住民と清掃を行うもので、今回が二回目。参加した3年生の[]さんは「汚れたところがきれいになっていくのが楽しい」と話していました。

「広報こばやし1月1日号」より抜粋

(6) 検証授業のまとめ

① 生徒指導の機能に関して

学習活動後の自己評価の結果を分析すると、90%以上の生徒が積極的に互いに協力しながら自分の役割をきちんと果たすことができたと感じているようである。普段の学校生活での実態と比較してもかなり高い数字を示している。また、「活動は充実していましたか。」という問いに対しては、92%の生徒が充実していたと答えており、その理由として、「自分の地区をきれいにすることで、地区の人が喜んでくれたから」や「みんなで協力して分別までできたから」という答えがあった。なかでも、地域の人たちから「ありがとう」という言葉をかけられたことに充実感を感じた生徒が多かったようである。生徒の感想には、活動を通して、自分の今までの行動を振り返ったり、これから何をすべきかを考えたりした内容が多かった。また、地区の行事や青年団の活動に参加してみたいと答えた生徒も90%いた。

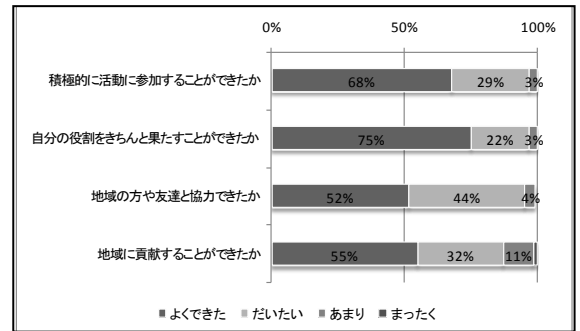
このようなことから、地域社会と関わりながら学習活動を行うことで、生徒指導の機能をより効果的に生かした活動ができたと考える。

② 協働に関して

協働事業を終えて、小林市区長会連絡協議会と小林市青年団協議会からそれぞれ事業振り返りシートを提出してもらった。シートを分析してみると計画段階では、協働を行う理由、目的の共有は概ね明確だったようである。しかし、事業計画作成については、話し合いの時間の設定が難しく、十分に議論することまでには至らなかった。今回は、第1回の担当者打合せから実施までの期間が1ヶ月と短かったことが原因だと考えられる。今後は、年間計画をしっかりと立て、年度当初に第1回の打ち合わせ会を持ち、話し合いなどを重ねながら事業計画を立てていけるようにしていきたい。実施段階では、昨年度の地区一斉清掃に比べ、それぞれの団体の主体的な取組がみられ、役割分担を明確にすることができていた。一方で、今回は雨天のため日程が変更になった際に連絡調整が難しく、地域の方々の参加が少なかった。このように問題や課題が発生しときや、企画の修正が必要になったときの手立てを具体的に協議しておく必要があった。また進捗状況の連絡を取り合う体制の整備も必要であった。

協働について、2つの団体共に計画段階に課題は残るものの概ね成果があったという回答であった。

今回の活動では、区長と地域の方々の打合せにより、生徒たちの指導・支援を地域の方々が中心となって行ってくださった。また、市の広報誌の活用や生活環境課との連携なども自主的に図っていただいた。協働を行うことにより、昨年度よりも充実した連携ができ教育的効果も高められたと考える。



学習活動後の自己評価の結果

III 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 事業計画シートを活用することで、それぞれの団体と事業の目的を共有することができ、互いの使命や役割を認識しながら、それぞれの団体の資源を有効に活用した主体的な関わりがみられた。
- (2) 地域と協働して活動を行うことで、地域の方々が学校が求める活動の目的や意義も明確に理解していただき、主体的に生徒の支援をしていただき、生徒指導の機能がより効果的に生かされ、生徒たちの意欲や協調性を引き出すことができた。
- (3) 地域に貢献することで、地域の方々からの「ありがとう」などの賞賛を受けて、素直に喜び、活動に充実感を持った生徒が多かった。自分の今までの行動やこれから何をすべきかを考えることで、自己理解や自己受容を深めることにもつながることができた。

2 課題

- (1) 自己指導能力育成には生徒指導の機能が生かされた学習活動の積み重ねが大切である。協働による学習活動を総合的な学習やこすもす科、学級活動、道徳などとの関連も考えた上で、地区一斉清掃だけでなく教育課程の中で計画的に実施していきたい。
- (2) 協働を行う際に、問題や課題が発生した場合の手立てについての研究を行い、協働がより充実するようにしていきたい。
- (3) 今回の検証授業では、日程の都合などでPTA活動との協働が実践できなかった。今後は、PTA活動でも協働を実践し、学校、家庭、地域の関係がより密接になるようにしていきたい。

〈参考文献〉

文部省（昭和56年）『生徒指導の手引き』、文部省（昭和63年）『生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導』
文部科学省（平成20年3月）『中学校学習指導要領』、宮崎県教育委員会（平成15年3月）
『宮崎の教育創造プラン～宮崎ならではの教育～』、小林市教育委員会（平成17年）『小林市の教育』、
小林市（平成21年）『市民協働の手引き』、三省堂『新明解 国語辞典』、〈研究実践学校〉小林市立小林中学校